

# 審査員特別賞

「 人生の春夏 」

公共学科 3年 田熊紫織

思うと私はいつも過去を羨んでいる。

高校を卒業した私は、人生の春が過ぎてしまったのだと思っていた。

大学生になってすぐ、私は「高校生っていいな」と口にした。制服を着て決まった時間に登校することが懐かしくて。高校の時は中学が一番楽しかったと言った。中学の時も、小学生に戻って習い事を真剣やれば良かったと思っていた。

大学3年の夏、ようやく今が自分の羨むものなんだと気付いた。こんな単純なことに気付くまで20年もかかってしまった。

Gatewayから見える高校生の姿。私は3年前までそこにいた。この丸くて大きい建物のことを図書館だとは知らなかったような気がする。今ではこの大学に進学し、Gatewayから高校を見下ろすようになった。

高校の時、大学生は大人だと思っていた。だが、今はそうは思わない。親に頼り、友達とくだらないことをして遊んでいる。これは大学生だからできることなんだろう。就職をすると一人暮らしをするかもしれない。近くにいた友達が遠くなるかもしれない。

私が読んでいた本に「大学は、子どもが子どもでいられる最後の最後のところですよ。なんかそれがまぶしくてね、ぼくは好きです」と書かれていた。これは「犬のかたちをしているもの」という小説に出てくる大学職員のセリフである。結局、大人になってからもそんなことを思うのだ。だから私は社会人になってなるべく「大学生っていいな」と口にしないように、今を悔いなく過ごしていけたらいいなと思っている。きっと私のことだから、大学職員と同じように過去がまぶしくなってしまうんだろうけど。

そんなことを考えながら、今日も私はGatewayにいる。外を眺めていると過去の私が光ったような気がした。私はあと少しだけ、子どもでいていいのかもしれない。大人になってからもGatewayに来よう。目に映るものが変わっているかもしれない。

私はこれから人生の夏を謳歌しようと心に誓った。